

弦楽合奏団

エテルニータ

第2回コンサート

Eternita — イタリア語で“永遠”という意 —

2004年1月11日(日) 2:00 pm
パーティとちぎ女性センター

プログラム

モーツァルト デイヴェルティメント 二長調 K.136
W.A.Mozart Divertimento D-Dur K.136

- I Allegro
 - II Andante
 - III Presto
-

ハイドン チェロ協奏曲 二長調
F.J.Haydn Cello concerto D-Dur

- I Allegro moderato
- II Adagio
- III Rondo.Allegro

〈チェロ独奏 玉川 克〉

休憩

ロッシーニ 弦楽のためのソナタ 第1番 ト長調
G.A.Rosini Sonata for strings No.1 G-Dur

- I Moderato
 - II Andantino
 - III Allegro
-

バッハ=ニールセン シャコンヌ
J.S.Bach=C.A.Nielsen Chaconne

プログラムノート

◆ W.A.モーツァルト (1756~1791) ディヴェルティメント 二長調 K.136

17、8世紀のフランス・オペラには幕間のつなぎとして踊りや舞曲、または間奏曲などが組み込まれ、華やかに上演されていた。そのような間奏曲のスタイルから受け継いだディヴェルティメント(喜遊曲)は娯乐的雰囲気をもった自由形式の器楽曲となり18世紀後半に盛んに演奏された。

モーツァルトは約20曲のディヴェルティメントを作曲したが、この作品は1772年(16歳)2度目のイタリア旅行中に書かれたものでモーツァルトらしい洗練された遊びの精神を感じることができる。

第1楽章はアレグロ、4/4拍子で書かれたソナタ形式で第1主題が第1ヴァイオリンで始まり、イ長調に転調した第2主題は、第2ヴァイオリンが奏し、展開部はこれらの主題が中心となって発展する。

第2楽章はアンダンテ、3/4拍子でト長調で書かれ3部形式、続く第3楽章はプレスト、2/4拍子。再び二長調で書かれたロンド風ソナタ形式となっている。

◆ F.J.ハイドン (1732~1809) チェロ協奏曲 二長調 Hob.VII b:2

ハイドンがエステルハーゼ侯の楽団の楽長を務めていた時に楽団員のチェリストであったクラフトのために作曲された。第1楽章はアレグロ・モデラート、4/4拍子で協奏風ソナタ形式により素朴で田園風の第1主題と、歌曲的な第2主題からなる。第2楽章はアダージョ、2/4拍子でイ長調で書かれた叙情的な作風の二部形式。第3楽章はアレグロ、6/8拍子で再び二長調に戻り、主題が主役となったロンド形式をとり、主題の間に第1エピソード、第2エピソードが挿入される。

◆ G.ロッシーニ (1792~1868) 弦楽のためのソナタ 第1番 ト長調

オペラの作曲家として有名なロッシーニはモーツァルト同様に幼い頃から音楽家である両親のもとで音楽に親しんでいた。またハイドンやモーツァルトを崇拝していたこともあり当時流行していたディヴェルティメントの影響が窺われる。12歳のロッシーニが多少の不完全さを残しながらも、彼ならではの豊かな旋律美により魅力的な作品として親しまれている。

第1楽章はモデラート、4/4拍子。第2楽章はアンダンティーノ、3/4拍子。第3楽章はアレグロ、6/8拍子。

◆ J.S.バッハ (1685~1750) チャッコーナ(シャコンヌ) / ニールセン編曲版

シャコンヌはスペインの大航海時代、メキシコから伝わったとされる3拍子の舞曲で、サラバンドやパッサカリアと同様に2拍目にアクセントをもつリズムが特徴で変奏曲形式の形をとっている。

バロック様式のフランス風組曲においてアルマンド、クーラント、サラバンド、ジグといった基本的な並びの中にも次第に民族的な舞曲をもとり入れることで変化にとんだ組曲となり、気高く語りかけるシャコンヌの存在は常にその終曲として置かれた。バッハの無伴奏ヴァイオリンパルティータ第2番二短調BWV1004でも終曲であるこのシャコンヌは名曲であるとともに、プゾーニヤストコフスキーによってピアノ曲や管弦楽のために編曲されている。この堂々としたシャコンヌは二短調から始まり多彩な和声進行に彩られながら豊富な音型を施し緊張感を高めていく前半から、長調に移行する中間部の開放感へ、そして再び短調へと戻り、次第に元のシャコンヌの主題へと導かれる。

(当合奏団チェンバリスト・沼尾美和子)

弦楽合奏団『エテルニータ』メンバー

ヴァイオリン

青柳 敬子

宇都宮短期大学卒業。
増田貴子、星野和夫、吉村成司、鈴木鎮一の各氏に師事。
現在、才能教育研究会宇都宮支部バイオリン科指導者。
宇都宮室内合奏団、スズキアンサンブル「弦」メンバー。

片山 淑子

札幌在住。国立音楽大学ヴァイオリン科卒業。在学中、故 久保田良作氏に師事。卒業後、ソロ、室内楽を浦川宜也氏に師事。
アンサンブル「どるちえ」を結成し小学校はじめ道内各地にて演奏活動。1990年にリサイタルを行う。札幌交響楽団に5年在籍。現在、後進の指導に力を入れている。

神山 明子

鹿沼市立西中学校管弦楽部でコンサートミストレスを務める。
宇都宮短期大学音楽科バイオリン専攻卒業。川沼文夫、星野和夫の各氏に師事。現在、埼玉県にある江原音楽療法専門学校音楽療法学科1年在学中。

川俣 洋子

国立音楽大学器楽科卒業。同大学大学院器楽専攻修了。
岩本政蔵、井上武雄、鷲見健彰、鷲見四郎、石橋洋子、梅津南美子の各氏に師事。宇都宮にてジョイントリサイタル、ヴァイオリン二重奏のタペ開催。アルピノー二室内合奏団を経て、現在、フリーの演奏家としてオーケストラ、室内楽等で活動及び、後進の指導を行っている。

小松崎 倫子

武蔵野音楽大学器楽学科卒業。
故 鈴木史子、萩原耕介の各氏に師事。
栃木県交響楽団、ベルベート弦楽四重奏団、宇都宮室内合奏団に所属。宇都宮市立旭中学校教諭。

篠原 香乃子

武蔵野音楽大学器楽学科卒業。故 永岡国雄、吉村成司、星野和夫、掛谷洋三の各氏に師事。
ヴァイオリン教室「カノン」を開き、これまでに、宇都宮コミュニティカレッジ、柿の木幼稚園でヴァイオリン講師を務めるなど後進の指導にあたっている。オーケストラ、室内合奏等でも活動中。
宇都宮室内合奏団メンバー。

土屋 恵子

上野学園大学音楽学部器楽学科卒業。
増田貴子、吉村成司、竹内茂の各氏に師事。
上野学園オーケストラ助手を8年、同ヴァイオリン教室講師を23年務めた。現在、自宅での後進の指導に力を入れている。
宇都宮室内合奏団メンバー。

福富 恵子

宇都宮短期大学卒業。吉村成司、鷲見健彰の各氏に師事。
現在、室内合奏団、オーケストラ等に参加。
柿の木幼稚園でヴァイオリン講師を務めるなど後進の指導にあたっている。宇都宮室内合奏団メンバー。

星野 和夫

慶應義塾大学哲学科(美学)卒業。宇都宮短大音楽科・作曲主任教授。ヴァイオリンを久保田良作、指揮を山田一雄等の各氏に師事。
作曲は独学。これまで、栃木フィル、鹿沼フィル、宇都宮室内合奏団の各指揮者を歴任。現在、宇都宮短大・弦楽オケ、同合唱及びBBU等の指揮者、メイプル四重奏団のVn.&Va.奏者。また、国際芸術連盟の作曲家会員として、主に首都圏にて作品を発表。

山田 美津子

東京都立大学理学部卒業。ヴァイオリンを星野和夫氏に師事。
2000年 八雲オーケストラ結成に参加。

ヴィオラ

小崎 えり子

国立音楽大学器楽科卒業。
群馬交響楽団在籍後、ラク弦楽四重奏団でヴィオラを中心に活動。現在群馬室内合奏団団員。室内楽を中心に、演奏活動をしながら後進の指導にあたっている。

川沼 文夫

宇都宮短期大学音楽科バイオリン専攻卒業。東京芸術大学別科ピオラ専攻卒業。立花和夫、吉村成司、鷲見四郎、中塚良昭、鈴木鎮一の各氏に師事。
現在、才能教育研究会宇都宮支部バイオリン科指導者。
宇都宮室内合奏団、スズキアンサンブル「弦」メンバー。

コントラバス

増山 一成

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。ウィーン国立音楽大学に留学。沖不可止、今村清一、江口朝彦、小野崎充、ルートヴィッヒ・シュトライヒャーの各氏に師事。現在、読売日本交響楽団団員。宇都宮短期大学附属高校音楽科非常勤講師。エコーアンサンブルオーケストラ、宇都宮室内合奏団メンバー。

チェロ

荒川 育子

国立音楽大学器楽学科卒業。現在、室内合奏団、オーケストラ等に参加。後進の指導にあたる。宇都宮室内合奏団メンバー。

玉川 克

1996年 栃木県学生音楽コンクール1位入賞。
1998年 札幌チェロジュニアコンクール奨励賞受賞、日本クラシック音楽コンクール3位入賞。
現在、桐朋学園大学カレッジディプロマコース4年在学中。
マリオ・ブルネロ、ジャン・ギアン・ケラス、両氏のマスタークラスを受講。2003年若い人のための「サイトウ・キネン室内楽勉強会」に参加。チェロカルテットの演奏会を開くなどソロ、室内楽、オーケストラなどで活躍中。宮田豊、尾形篤信、増淵滋、林峰男、倉田澄子の各氏に師事。

エキストラ

ヴィオラ グレゴリー・ディール

チェロ 宮坂 俊一郎